

# 東洋文化史大系

漢魏六朝時代

元國學院大學教授  
大正大學教授  
石田幹之助 等  
監修



誠文堂新光社

昭和十三年四月五日印刷  
昭和十三年四月十日發行

系大史化文洋東

卷二第

編纂者

小沼勝衛

東京市神田區錦町一ノ五  
株式會社新光文堂誠

右代表者

附小石川通文墨

古文真賞

卷之三

市小石川區久堅町

其司印刷業

步履集

田園錦町二丁目五番地

卷之十

文選新光並

包話神田

讀書日

舊約全書

卷之三

卷之三

發行所

會株式  
誠文堂新光社

# 漢魏六朝時代

## 目 次

### 一、總 説

松井等

秦漢帝國の出現	二
漢代の社會と文化	三
アジャの文化交流	五
魏晉・東晉の世相	七
南北朝時代のアジャ	九

### 二、概 説

志田不動磨

秦の統一	二
紀元前三世紀の世界	二
先秦時代西方文明の影響	三
戰國末の社會情態	三
戰國末の社會情態	四
統一のための指導的原理	四
始皇帝の即位とその統治	五
匈奴と南越征伐の事業	五
支那といふ國號の起源	六
社會的矛盾の激化と秦室の滅亡	六

### 三、制度と社會

志田不動磨

漢の官制	全
漢初の内政	三
漢初の經濟情勢と財政	三
武帝の外征	三
財政の逼迫と專賣事業	三
宣帝の中興と漢の衰亡	三
後漢の隆盛と衰亡	三
全盛期の後漢	三
西域經營	三
佛教の傳來と大月氏國	四
衰亡期の後漢	四
兩漢の學術・思想・文化	四
三國鼎立の時代	四
社會的混亂から三國の鼎立へ	四
三國時代の社會經濟情勢	四
西晉と五胡の亂華	五
武帝の政治	五
八王の亂	五
五胡十六國時代	六
南北朝對立の時代	七
北魏の勃興からその全盛時代へ	七
北魏の分裂と周齊の對立	七
東晉から南朝へ	七
南北朝の學術・思想・文化	七
漢の財政	八
租税	八
貨幣	八
農業	九
土地制度	九
工業	九
商業	十
人口	十一
漢の財政	十二
財政組織	十二

### 前漢の興隆

財政政策の變遷	一六	社會思潮	一四三
鹽・鐵・酒の專賣	一八	高踏的思潮	一四三
常平倉	一九	逸民の尊重	一四四
元帝以後の財政方針	二〇	老莊思想の流行	一四五
後漢の財政方針	二一	方外の士としての佛徒	一四五
南北朝時代の財政・經濟	二二	佛徒の貴族化	一四五
人 口	二三	高踏的思潮流行の理由	一四五
農業及び土地	二四	清談の變遷	一四五
商業及び貨幣	二五	清談	一四五
五、漢魏六朝の思潮		清談の起源	一四七
漢代思潮の概觀	柴田宣勝	竹林七賢其他	一四九
序 説		復古思想	一五〇
漢初の黃老思想		自然主義的思潮	一五〇
武帝の思想統一		宗教思潮	一五〇
漢代儒學の特質		神祕的思想の兩面	一五〇
黃老道家の思想		妖 賤	一五〇
六朝時代の思潮	板野長八	道教の組織化	一五〇
政治思潮		佛教的信仰の浸潤	一五〇
禮律の接近		哲學思潮	一五〇
王道の絕對化		一元論的思想	一五〇
禮教問題と帝王絕對性		一元論的思想の發展	一五〇
五胡の君主と儒教			
北朝における帝王絕對性			
社會思潮		佛教の傳來と後漢三國・兩晉の佛教	一五五
高踏的思潮		西域との交通及び佛教の傳來	一五五
逸民の尊重		東晉羅什の佛教	一五六
老莊思想の流行		般若經の研究	一五六
方外の士としての佛徒		羅什の功績	一五六
佛徒の貴族化		南北朝時代の佛教	一五六
高踏的思潮流行の理由		概 説	一五六
清談の變遷		經典翻譯の殷盛	一五六
清談		造寺造塔と造像出家及び石窟開鑿	一五六
清談の起源		經典の組織的研究の勃興	一五六
竹林七賢其他		涅槃宗の勃興	一五六
復古思想		成實宗の勃興	一五六
自然主義的思潮		毘盧宗・俱舍宗の勃興	一五六
宗教思潮		地論宗・攝論宗の勃興	一五六
神祕的思想の兩面		淨土教の勃興	一五六
妖 賤		禪宗の勃興	一五六
道教の組織化		天台宗の勃興	一五六
佛教的信仰の浸潤		三論宗の勃興(附・四論宗の勃興)	一五六
哲學思潮		經宗・律宗・論宗	一五六
一元論的思想		三階教	一五六
一元論的思想の發展		實相論の發達	一五六
六、佛教の傳來とその弘布			
久保田量遠			
七、漢魏六朝の學問と文學			

長澤規矩也

學問

記述の感度

〔二二〕

漢初の儒學

〔二三〕

董仲舒の學說

〔二四〕

一經専門と師說尊重

〔二五〕

今古文の別

〔二六〕

兩度の講論

〔二七〕

劉向と劉歆

〔二八〕

揚雄

〔二九〕

後漢魏晉の賦家

〔二一〕

後漢の名儒

〔二二〕

鄭玄

〔二三〕

王充

〔二四〕

識練の學

〔二五〕

儒教の起源

〔二六〕

漢代の儒教

〔二七〕

儒教の經典

〔二八〕

易と書

〔二九〕

詩

〔二一〕

禮

〔二二〕

春秋

〔二三〕

論語・孝經・孟子

〔二四〕

石經

〔二五〕

王肅

〔二六〕

魏晉の經學

〔二七〕

工藝

略說

〔二八〕

漢代銅器

〔二九〕

漢魏六朝の銅鏡

〔三〇〕

漢代漆工藝

〔三一〕

諸他の漢魏六朝工藝

〔三二〕

影刻

〔三三〕

霍去病墳墓の石彫群

〔三四〕

墓飾石彫の發達

〔三五〕

魏晉南朝の彫刻

〔三六〕

北朝佛像彫刻の發達

〔三七〕

繪畫

〔三八〕

前漢

〔三九〕

後漢

〔四〇〕

三國

〔四一〕

晉

〔四二〕

南北朝

〔四三〕

隋

〔四四〕

唐

〔四五〕

音樂

〔四六〕

緒說

〔四七〕

漢樂の大勢

〔四八〕

漢樂の內容

〔四九〕

雅樂の聲律

〔五〇〕

雅樂の樂器

〔五一〕

樂府の內容

〔五二〕

清商樂（清樂）

〔五三〕

八、漢魏六朝の藝術と書道

建築及び裝飾

〔五四〕

長廣敏雄

散樂(百戲) ..... 一五〇

律論 ..... 一五三

胡樂 ..... 一五四

結論 ..... 一五五

書道 ..... 藤原楚水

前漢時代の古隸 ..... 二五七

前漢時代の八分 ..... 二五九

後漢時代の名家 ..... 二六一

後漢時代の草草 ..... 二六三

後漢時代の楷書 ..... 二六五

後漢時代の書派の南北 ..... 二六七

三國六朝時代の書派の南北 ..... 二六九

九、漢魏六朝時代の北狄 ..... 二七一

江上波夫

北狄諸民族 ..... 二七三

匈奴 ..... 二七五

烏桓・鮮卑 ..... 二七七

蠕蠕 ..... 二七八

高車 ..... 二八〇

突厥 ..... 二八二

北狄の住居・服飾・飲食・武器・馬具 ..... 二八四

祭祠・葬禮・藝術 ..... 二八五

北狄の經濟的發展 ..... 二八六

## 一〇、漢魏六朝の西域

貴霜國と粟特國 ..... 三三一  
河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三二  
五涼の歴史的意義 ..... 三三三  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

松田壽男

河西王國及び北魏の西域貿易 ..... 三三一  
五涼の歴史的意義 ..... 三三二  
北魏の西域通商 ..... 三三四

中繼貿易國の誕生

# 一二、漢魏六朝時代の満鮮 と日本

岩井大慧

序論 ..... 三四

極東に現るゝ諸民族 ..... 三七

日・満・鮮の地理的特異性 ..... 四〇

極東諸國の文化狀態 ..... 四三

漢民族の植民國家と半島 ..... 四六

日満支鮮の交渉 ..... 四九

(目次  
了)

# 挿畫目次

原色版

棲蘭遺址出土の毛織物断片

ダブルトーン  
雲崗の石彫

三峽の嶮

六朝時代の女子土偶

成都丞相祠堂

## 一、總 説

萬里の長城	二
咸陽	二
阿房宮の遺跡	二
漢瓦	二
古神鏡	二
チエルチエン・ダリヤ附近の沙漠	三
蘭亭	三
ガンダーラ式彫像	三
王羲之の筆蹟	三
石獅	三
雲崗石窟寺の佛像及び菩薩像	四
龍門の石雕	四
成陽文瓦罐	三
阿房宮の瓦當	四
蘭沱宮瓦當	五
泰山刻石殘寫	六
長城(一)(二)	九
桂林	三
始皇陵	三
曲阜附近的泗水	三
鴻門の會跡	三
井口徑口附近の景	三
廟臺子張良廟遠望	三
前漢時代における人口分布圖	三

## 二、概 説

銹銹文瓦罐	一
成陽	一
武侯祠	一
武侯祠琴亭	一
關羽廟	一
銅雀臺址	一
大月氏錢貨	一
司馬遷墓と廟祠	一
卓文君の故宅址	一
漢代の風俗	一
劉備の陵	一
劉備祠	一
漢代の風俗	一
武侯祠	一
武侯祠	一
五丈原の古戰場	一
四川省劍閣	一
江蘇省江寧縣石頭城址	一
受禪碑	一
公卿上尊號	一
烏丸酋長の墓志	一
北方民族の印璽	一
前漢時代における人口分布圖	一

## 三、制度と社會

秦の衡器	一
長沙元年塗金鋤	一
漢代家屋模型	一
漢代の封泥	一
洛陽白馬寺の塔	一
漢辨天下瓦當	一
朝鮮黏土耳當	一
前縣元鼎四年專・五鳳三年碑	一
方格四乳葉紋鏡	一
漢千秋萬歲瓦當	一
漢甘泉上林瓦當	一
沈府君神道石闕細部彫刻	一
後漢熹平石經殘字	一
漢瓦(益延壽宮)	一
素練四神鏡	一
泰安の泰廟より泰山を望む	一

## 四、漢魏六朝の財政

漢代の錢貨	二
鴻門の會跡	二
封泥	二
蒙古セレンガ河	二
蒙古トラ河風景	二
敦煌千佛崖	二
新莽封泥	二
權銘	二
新莽の劍銘	二
嘉峪關の現景	二
敦煌西玉門關址	二
敦煌縣附近古哨營址	二
玉門關跡	二
劉平國磨崖の刻文	二
高昌舊址	二
ターリム河風景	二
大月氏錢貨	二
コータン附近の一風景	二
烏龍潭	二
中岳嵩靈廟碑	二
梁の蕭景墓前の石獸	二
梁の武帝墓前有翼四肢獸	二
南朝齊の武帝墓前有翼四肢獸	二
牛首山普覺寺	二
少林寺	二
慧遠墳墓石室	二
簡寂觀門	二
西林寺	二
唐墓王羲之書喪亂帖	二
劉備下生石像臺座の一部(其一)	二
劉備下生石像臺座の一部(其二)	二
胡服女子像	二
胡服男子像	二
顏氏家訓	二
黃武買地瓦券	二
齊民要術	二
買地宅券	二
胡服男子像(其一)	二
胡服男子像(其二)	二
胡服男子像(其三)	二
胡服男子像(其四)	二
胡人男子像	二
顏氏家訓	二
劉勒下生石像臺座の一部(其二)	二
劉勒下生石像臺座の一部(其三)	二
漢辨天下瓦當	三
朝鮮黏土耳當	三
前縣元鼎四年專・五鳳三年碑	三
方格四乳葉紋鏡	三
漢千秋萬歲瓦當	三
漢甘泉上林瓦當	三
沈府君神道石闕細部彫刻	三
後漢熹平石經殘字	三
漢瓦(益延壽宮)	三
素練四神鏡	三
泰安の泰廟より泰山を望む	三

後漢時代における人口分布圖

山東の黃土

支那の發達せる黃土

盛夏の甘肅省

九

寶陽洞內佛像

九

龍門石雕

九

蒙古窩出土の鐵器

九

朝鮮渭原出土の鐵器

九

前漢末期の產業交通圖

九

漢の銀鍊

九

後漢の五銖錢

九

前漢の貨幣の變遷(一頁大)

九

王莽の銅錢(一頁大)

九

秦の權泉

九

漢の嘉量

九

齊民要術

九

買地宅券

九

胡服男子像(其一)

九

黃武買地瓦券

九

齊民要術

九

買地宅券

九

胡服男子像(其二)

九

胡服男子像(其三)

九

胡服男子像(其四)

九

胡人男子像

九

顏氏家訓

九

劉勒下生石像臺座の一部(其一)

九

劉勒下生石像臺座の一部(其二)

九

漢辨天下瓦當

九

朝鮮黏土耳當

九

前縣元鼎四年專・五鳳三年碑

九

方格四乳葉紋鏡

九

漢千秋萬歲瓦當

九

漢甘泉上林瓦當

九

沈府君神道石闕細部彫刻

九

後漢熹平石經殘字

九

漢瓦(益延壽宮)

九

素練四神鏡

九

泰安の泰廟より泰山を望む

九

封泥と漢瓦(安樂未央) ..... 一四  
漢瓦(上林) ..... 一五  
長宜子孫内行花紋鏡 ..... 一六  
環狀亭の秦碑 ..... 一七  
畠地となれる鴻門の會址 ..... 一八  
峽中の船着場 ..... 一九  
巫山峽 ..... 二〇  
白帝城 ..... 二一  
建築・建康の故地 ..... 二二  
吳の孫權夫人靈澤の廟 ..... 二三  
正始石經の殘石 ..... 二四  
支硎山と古刹 ..... 二五  
流觴亭 ..... 二六  
經石裕 ..... 二七  
雲閣石佛古寺 ..... 二八  
雲閣西方窟全景 ..... 二九  
雲閣石窟第三窟大佛左脇侍 ..... 三〇  
第三窟禮讚の女人 ..... 三一  
雲閣後宮嬉戲の闇 ..... 三二  
六、佛教の傳來とその弘布

釋迦牟尼佛說法圖 ..... 三三  
華嚴經 ..... 三四  
金剛般若經と大智度論 ..... 三五  
金剛般若經拓本 ..... 三六  
敦煌千佛洞 ..... 三七  
出三藏記集 ..... 三八  
釋迦說法 ..... 三九  
龍門石窟 ..... 四〇  
河南省鞏縣の石窟 ..... 四一  
敦煌出土大般涅槃經 ..... 四二  
阿毘曇心論 ..... 四三  
阿含經と十誦律 ..... 四四  
俱舍論 ..... 四五  
摩訶僧祇律 ..... 四六  
大乘起信論の研究 ..... 四七

## 六、佛教の傳來とその弘布

石壁山玄中寺金像 ..... 三八  
烟地となれる鴻門の會址 ..... 三九  
峽中的船着場 ..... 三九  
巫山峽 ..... 三九  
白帝城 ..... 三九  
建築・建康の故地 ..... 三九  
吳の孫權夫人靈澤の廟 ..... 三九  
正始石經の殘石 ..... 三九  
支硎山と古刹 ..... 三九  
流觴亭 ..... 三九  
經石裕 ..... 三九  
雲閣石佛古寺 ..... 三九  
雲閣西方窟全景 ..... 三九  
雲閣石窟第三窟大佛左脇侍 ..... 三九  
第三窟禮讚の女人 ..... 三九  
雲閣後宮嬉戲の闇 ..... 三九

## 七、漢魏六朝の學問と文學

春秋繁露 ..... 八一  
古文尙書孔氏傳 ..... 八二  
白虎通德論 ..... 八三  
揚子法言 ..... 八四  
六朝鈔本服注左傳 ..... 八五  
舊刊本春秋左氏傳 ..... 八六  
宋刊本周易 ..... 八七  
詩 改 ..... 八八  
河間毛公祠 ..... 八九  
漢石經 ..... 八九  
講周易疏論家義記 ..... 九〇  
原本玉篇(二頁大) ..... 九一  
漢魏六朝一百三家集 ..... 九二  
子虛賦 ..... 九三  
曹子建文集 ..... 九四  
史記疏證 ..... 九五  
論衡 ..... 九六  
三謝詩 ..... 九七  
文選 ..... 九八

## 七、漢魏六朝の學問と文學

百塔寺碑塔 ..... 八九  
信行遺文 ..... 八九  
雲閣第二窟東壁諸佛 ..... 八九  
灌頂 ..... 八九  
三階教の研究 ..... 八九  
百塔寺碑塔 ..... 八九  
信行遺文 ..... 八九  
雲閣第二窟東壁諸佛 ..... 八九  
漢式象嵌文の例 ..... 八九  
漢魏六朝の銅鏡 ..... 八九  
漢式銅壺と銅鼎 ..... 八九  
漢魏六朝の銅鏡 ..... 八九  
瓦當 ..... 八九  
瓦當 ..... 八九  
穀壁 ..... 八九  
霍去病の石馬 ..... 八九  
立上らうとする石馬 ..... 八九  
羊を食む胡人 ..... 八九  
蹄つた牛 ..... 八九  
簷相闌の石人 ..... 八九  
四川高頤墓の石獅 ..... 八九  
虛空に弓をひく ..... 八九  
孝堂山畫象石 ..... 八九  
漢の土偶 ..... 八九  
傳銅雀臺の獅子 ..... 八九  
武氏祠畫象石 ..... 八九  
兩城山畫象石 ..... 八九  
元嘉佛 ..... 八九  
龍門賓陽洞 ..... 八九  
禮拜諸天 ..... 八九  
大同雲崗露天 ..... 八九  
龍門賓陽洞浮彫 ..... 八九  
北魏山石佛と菩薩像 ..... 八九  
龍門 ..... 八九  
魏の泥像 ..... 八九

## 八、漢魏六朝の藝術と書道

孝堂山石室畫像石(一)(二) ..... 一〇一  
武梁氏石室畫像石(二頁大) ..... 一〇二  
漢代漆繪畫 ..... 一〇三  
漆盆細部(一) ..... 一〇三  
漆盆細部(二) ..... 一〇三  
顧愷之筆女史箴圖卷(一)(二) ..... 一〇四  
顧愷之筆女史箴圖卷(三) ..... 一〇四  
五星二十八宿眞形圖の一部 ..... 一〇四  
範例 ..... 一〇四  
四川省渠縣沈府君神道石闕 ..... 一〇五  
漢代建築における斗拱の例 ..... 一〇六  
漢代導築法の例 ..... 一〇七  
漢代土墳における木部構造の模 ..... 一〇七  
範例 ..... 一〇七  
四川省渠縣沈府君神道石闕 ..... 一〇七  
山東歷城縣神通寺四門塔 ..... 一〇八  
北魏式忍冬唐草文様 ..... 一〇九  
漢式銅壺と銅鼎 ..... 一〇九  
漢式象嵌文の例 ..... 一一〇  
漢魏六朝の銅鏡 ..... 一一〇  
瓦當 ..... 一一〇  
瓦當 ..... 一一〇  
穀壁 ..... 一一〇  
霍去病の石馬 ..... 一一〇  
立上らうとする石馬 ..... 一一〇  
羊を食む胡人 ..... 一一〇  
簷相闌の石人 ..... 一一〇  
四川高頤墓の石獅 ..... 一一〇  
虛空に弓をひく ..... 一一〇  
孝堂山畫象石 ..... 一一〇  
漢の土偶 ..... 一一〇  
傳銅雀臺の獅子 ..... 一一〇  
武氏祠畫象石 ..... 一一〇  
兩城山畫象石 ..... 一一〇  
元嘉佛 ..... 一一〇  
龍門賓陽洞 ..... 一一〇  
禮拜諸天 ..... 一一〇  
大同雲崗露天 ..... 一一〇  
龍門賓陽洞浮彫 ..... 一一〇  
北魏山石佛と菩薩像 ..... 一一〇  
龍門 ..... 一一〇  
魏の泥像 ..... 一一〇

孝堂山石室畫像石(一)(二) ..... 一〇一  
武梁氏石室畫像石(二頁大) ..... 一〇二  
漢代漆繪畫 ..... 一〇三  
漆盆細部(一) ..... 一〇三  
漆盆細部(二) ..... 一〇三  
顧愷之筆女史箴圖卷(一)(二) ..... 一〇四  
顧愷之筆女史箴圖卷(三) ..... 一〇四  
五星二十八宿眞形圖の一部 ..... 一〇四  
範例 ..... 一〇四  
四川省渠縣沈府君神道石闕 ..... 一〇五  
漢代建築における斗拱の例 ..... 一〇六  
漢代導築法の例 ..... 一〇七  
漢代土墳における木部構造の模 ..... 一〇七  
範例 ..... 一〇七  
四川省渠縣沈府君神道石闕 ..... 一〇七  
山東歷城縣神通寺四門塔 ..... 一〇八  
北魏式忍冬唐草文様 ..... 一〇九  
漢式銅壺と銅鼎 ..... 一〇九  
漢式象嵌文の例 ..... 一一〇  
漢魏六朝の銅鏡 ..... 一一〇  
瓦當 ..... 一一〇  
瓦當 ..... 一一〇  
穀壁 ..... 一一〇  
霍去病の石馬 ..... 一一〇  
立上らうとする石馬 ..... 一一〇  
羊を食む胡人 ..... 一一〇  
簷相闌の石人 ..... 一一〇  
四川高頤墓の石獅 ..... 一一〇  
虛空に弓をひく ..... 一一〇  
孝堂山畫象石 ..... 一一〇  
漢の土偶 ..... 一一〇  
傳銅雀臺の獅子 ..... 一一〇  
武氏祠畫象石 ..... 一一〇  
兩城山畫象石 ..... 一一〇  
元嘉佛 ..... 一一〇  
龍門賓陽洞 ..... 一一〇  
禮拜諸天 ..... 一一〇  
大同雲崗露天 ..... 一一〇  
龍門賓陽洞浮彫 ..... 一一〇  
北魏山石佛と菩薩像 ..... 一一〇  
龍門 ..... 一一〇  
魏の泥像 ..... 一一〇

王獻之地黃陽帖（一頁大）	三五
鵝頭丸帖	三五
始平公造象記	二五六
楊大眼造像記	二五六
北魏永平四年中書令鄭文公碑	二五六
北魏正光三年張猛龍碑	二五六
劉宋大明二年寧州刺史爨龍顏碑	二五六
晉太享四年建寧太守爨寶子碑	二五六
九、漢魏六朝時代の 北狄	二五六
秦式銅人	二五七
匈奴の武器	二五七
匈奴の馬面と武器	二五七
動物形飾金具	二五七
霍去病墓前の石馬	二五七
ノイン・ウラ匈奴墳墓出土品	二五七
蠶蛹或是突厥の遺品	二五七
外蒙古ナインテスム古墳出土 絹布	二五七
匈奴或は突厥の遺品	二五七
古墳周囲の立石	二五七
シベリヤ出土動物形遺品	二五七
ノイン・ウラ匈奴墳墓出土品	二五七
塗刺繡	二五八
シベリヤ出土黃金製品	二五八
シベリヤ出土黃金製品	二五八
イエニセイ上流河谷岩壁刻畫	二五八
アルタイ山中古出土品鉛・鍼 戀・鍊・鏡・鏡具等	二五八
アルタイ山中古墳出土品木馬	二五八
アルタイ山中古出土品被服	二五八
匈奴使用的匙と刀子	二五八
A類移動的住居（住車）の一例	二五八
動物形鉤具即ち師比	二五八
匈奴使用的銅鏡	二五八
アルタイ山上流河谷岩壁刻畫	二五九
天山山脈の岩壁刻畫	二五九
アルタイ山中古墳出土樺皮製湖 鏡	二五九

アルタイ地方パヴィルク古墳出 土柳條製桶	二六〇
パヴィルク古墳内部	二六〇
と香葉	二六〇
匈奴の墳墓の墳壇	二六〇
ペヅイルク古墳出土フェルト製 鞍樽文様	二六〇
ノイン・ウラ古墳の木樽と木棺	二六〇
石膏製死假面	二六〇
死假面と髪髮	二六〇
イエニセイ河畔岩壁刻畫（一頁 大）	二六〇
一〇、漢魏六朝の西域	二六一
タクラマン沙漠	二六一
砂に埋れた古代住居址	二六一
沙漠に殘る古代城塞	二六一
ギジル出土壁畫	二六一
西域人の書いた駱駝	二六一
バクトリヤ王國の貨幣	二六一
于闐國の木簡	二六一
モンゴル人の住居	二六一
蒙古の風景	二六一
古代の漠地旅行	二六一
漢代長城の形骸	二六一
ニヤ河出土木簡	二六一
敦煌附近出土漢代木簡	二六一
彩漆箋短劍の一部	二六一
漢代彩繪漆箋（一頁大）	二六一
漢代斬墓壁畫古墳	二六一
同轄墓壁畫の一部	二六一
漢代玻璃製耳環	二六一
樂浪王墓耳環及び棺	二六一
兩耳圓周漆杯	二六一
女史箴圖卷の一部（一頁大）	二六一
神仙龍虎青象漆盤	二六一
漆鏡匣	二六一
黃金寶冠	二六一
黃金鏽帶と腰佩具	二六一

高昌城の現狀	三四
高昌出土墓碑	三五
隊商	三五
龜茲國の美術（一）	三六
ヨートカンの現景	三七
于闐出土のテラコッタ	三八
龜茲國の美術（二）（三）	三九
トムシユツク出土の佛頭と塑像	三九
敦煌千佛洞外景と窟院	三九
沮渠安周の造寺碑	三九
高句麗人風俗	四〇
高句麗大墓玄室内壁畫	四〇
高句麗人風俗	四一
高句麗の環頭大刀と旗桿	四一
高句麗人騎馬風俗	四一
高句麗人狩獵圖	四一
任那大伽耶王宮址	四一
蘇塗	四一
任那大伽耶耶王宮址	四一
沙羅	四一
任那大伽耶宮址出土の瓦當	四五
高句麗の牛車	四五
高句麗婦人服	四五
高句麗人角抵	四五
漢式銅鏡	四五
樂浪郡治址	五六
魏將母丘儉丸都山紀功碑斷片	五六
漢委奴國王之印	五六
翡翠玉及び飾附金環	五六
高句麗好太王碑	五六
好太王碑拓	五六
牟頭婁塚内の文記	五六
牟頭婁塚内の文記	五六
漢代亞吉亞形勢圖（卷末色刷）	五六
兩晉・南北朝時代アジャ形勢圖（卷末色刷）	五六

## 地圖目次

（地圖目次 了）

漢代アジャ形勢圖（卷末色刷）	二五九
兩晉・南北朝時代アジャ形勢圖（卷末色刷）	二五九
神仙龍虎青象漆盤	二六一
漆鏡匣	二六一
黃金寶冠	二六一
黃金鏽帶と腰佩具	二六一



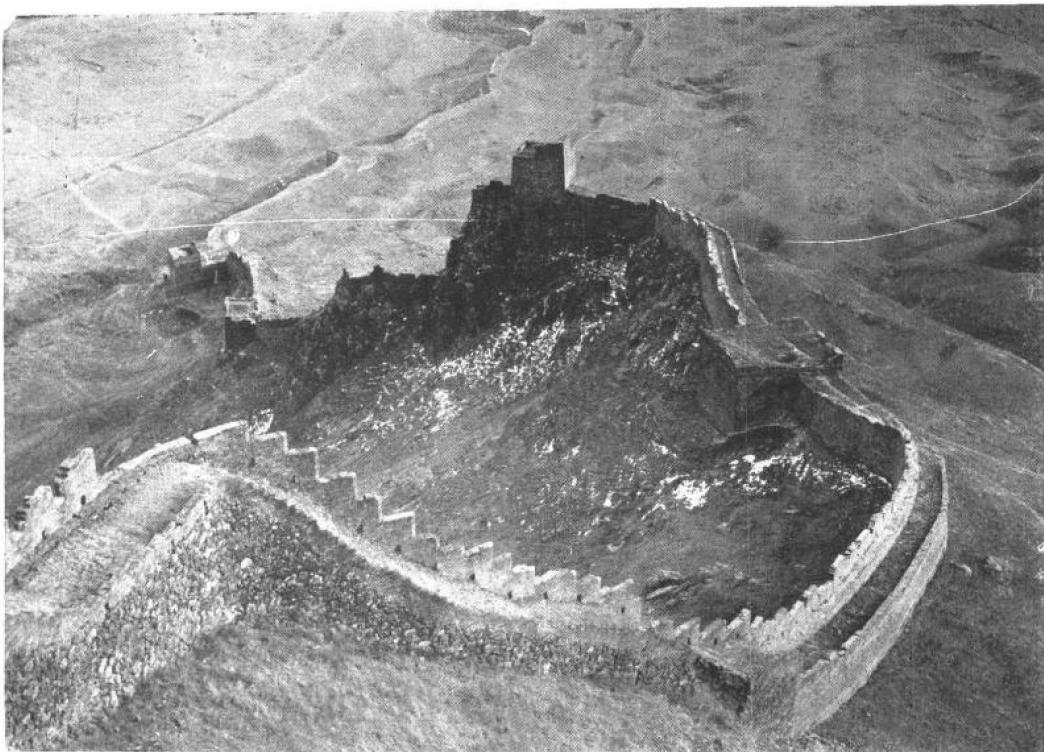
畫繪漆代漢の土出浪樂

系大史化文洋東

# 代時朝六魏漢

東洋文庫主事	東京方文化研究所化	女子大學講師	京東都方研究化	京東都方研究化	法政大學講師	東京方研究化	立正大學教授	立正大學教授	立正大學教授	東京方研究化	志田不動	松井
											西田	
											柴田	
											板野	
											長澤規矩	
											也	
											久保田量	
											長宣	
											勝	
											塵	
											等	

(執筆順)



城長の里萬  
かいなはでぶ存ひ思にろゝそも念の瞻望の卒將たつ守を境邊ぶ荒風朔たまてし。いならなばれけなし起想もさ猛拂の妙句

## 一、總

### 說

#### 秦漢帝國の出現

六王畢つて四海一なり、秦が六國を征服して法治主義によつて中央集権國家を建つるに及んで、ここに支那における最初の帝國が出現した。しかし封建分治の多年の慣習と古來の地方自治的慣習を打破して急激に中央集権による國家統制を圖つたことは、かへつて統制の破綻を招き生活の不安を増して、始皇帝の歿後早くも帝國の崩壊を見るに至つた。

漢朝が一方には封建遺習を矯めながら他の一方には中央集権の統制を及ぼすといふ漸進政策に成功して、漢朝成立の後約六七十年を経てほど中央集権の體制を整へ、國內統一の實績を擧げ得たことは、漢朝の誇とすべきところであり、帝國としての名實を具へたものである。

國內統制の實績を擧ぐるに伴つて、對外勢力も著るしき伸張を示してきた。その伸張の中で歴史的意義最も深きものは、匈奴民族に對して積極的討伐を決行したことである。匈奴は蒙古方面に蔓つて游牧人としての活動を續けてゐた民族であり、久しく支那内地の治安にとつて的一大脅威であつた。前の秦朝が匈奴に對して守勢に立つたのに反して、漢朝は攻勢の勇を振つた。匈奴討伐は、西に向つては漢と西域の交通を繁くする端緒を開き、東に向つては漢の領土を朝鮮北部に擴張する動機となつた。西域との交通は、支那文化に對する中央アジヤ文化の影響を複雑ならしめ、延いてはインド佛教東漸の前提となり、インドに關する支那人の知識を啓く端緒ともなつた。朝鮮北部が漢の領土に加へられたことは、朝鮮北部殊に大同江方面へ支那文化を移植するについて多大の成績をもたらしたものである。

漢朝が一旦倒れて史上に前漢として知られ、復興した漢朝が後漢と呼

ばれてゐるが、前漢は二百一年、後漢は百九十六年、合せて四百年に餘つてゐる。後漢の世に入つては、對外勢力伸張の氣勢頓挫した代りに、支那内地における社會生活の様相には幾多の變調を示しました先秦以來の支那文化の内容についても移りゆく時代の姿を浮べるに至つた。

前漢の盛時から後漢の中世に及ぶ間ににおいて、パミール高原の西から西北インドに亘る方面に現れた歴史的變化の著るしきものは大月氏民族の活躍である。前漢



てしに朝一めたの公佈れ哀がたつと都大の一第天下はに代御の皇始め定と都をとこが公孝の泰  
る。あで氣心無もに史亡興雄英はれ流した々洋。のもだん望を門城壁城、て隔を水渭は圖。たし化と都廢

パミール高原の西北にイングリッシュ・ヒルズの西側には、大月氏民族の活動域である。前漢の盛時にあたつてパミールの西アム河の平地に興つた大月氏の國は、前漢の末期にあたつて進んで西北インドを併合し、後漢の中頃に至つて大月氏國王カニシカが現れた。西北インドのインド河平地は、ペルシヤ文化ギリシャ文化、インド文化の諸要素の混生地帶であり、大乗佛教の發祥地ともなり、ガンダーラ佛教藝術の基地ともなつたのである。佛教そのものも、大月氏の領土を通じて支那へ流傳する機縁に接したのである。

漢代の社會と文化

前漢（せんかん）・後漢（ごかん）を通じての政治的（せいじてき）變化（かへい）よりも、それ以上歴史（れきし）の上（うえ）に重き（じゆき）をなすものは、同じ時代（じだい）における社會（しゃくわい）・生活（せいかつ）の變化（かへい）である。戰國時代（せんこじだい）から發展（はつきんでん）しつつある。



き大廣のそし役使を徒囚の萬十七やむ營をれこれに南の水堀皇始。るあでのもの語に後を名盛が皇始の豪にもとと城長は宮房阿助道の宮房阿  
ど者強キ草夏。るあでしふる好ておはさけ蓑のそらかるみてれさ記としふ建を旗の史五辻に下あしさ岸を人萬はに上丈十五北南歩百五西東。  
るあでろことだんりより南を踏道は圖。るあでみの茅偉の者嗣たし化と燧灰めたの初頭はひるす來去に駒の子遊会。とあの夢がま



力によつた商業經濟は、漢代に入つて愈々活氣を呈し、商人の社會的勢力が社會的勢力へと變じてゐる。

\*  
が昂たか  
まつてきた。商じやう  
業げいぎ、經けいき、  
濟じゆの進しん展てん  
に反はんして

て各自の富に不相應なる虚榮を競ふ傾向が長じてきた。生活程度の向上といふことは、漢代における物質文化機となり、工藝の如きは殊に著るしき進歩を示すにとて漢代の誇りといふべきものは紙の發明であつた。文化が如何に進歩してゐたかといふことは、近年の樂

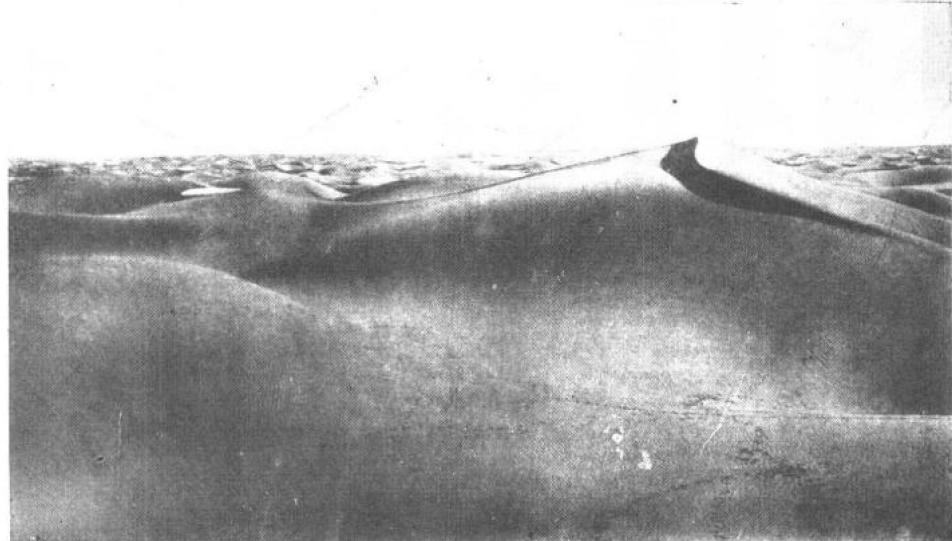
化の進歩を促す。



も前漢の盛時のこと

品藝術の代表の間年百四る至に漢後より漢前は鑑鏡 鏡神古  
いと銘のそがるあで鏡神の代時莽新はのたけ掲にこころあで  
るあできべきいと品藝術あるを織物に貢ひいと様女ひ

あり、即ち世事の變遷についての一種の豫言である。この豫言が流行したのは、後漢の晩年に至つて政治綱領が急速に人心大に動搖してきた爲である。



のそじ轉を所ひ從に風は丘沙。日天い白蒼と風い黒い海の沙るた涼しきなもしては 漢沙の近附ヤリダ。ンエチルエチ  
ルみてれらせ稱と堆龍りよ來古あゆ形のクステログは丘沙の漢沙のこと。るあで域の砂流るゆはいるへ變を姿

であるが、孔子の教は漢朝の統一政策を助成する目的によつて推奨されるに至つたものであつり、民間一般の生活を誘導する思想的努力を占めたものではない。民間一般に流行したもののは功利思想であり、その思想に基いて幾多の占術が信仰され、その占術の理論的基礎となつたものは五行説である。五行説に基いて人事の吉凶を占ふ理論を深く神祕化したものが讖緯説で



をてれば呼とホ蘭。るあが亭一に涪蘭縣興紹省江浙 事蘭  
。るれらへ傳とたしのをを序集豪蘭な有名でここが之義王り

西域方面と支那の交通は、前漢の盛時から繁くなつて、その交通に作用なつてインドの佛教が支那へ傳はる機縁が開かれた。西域にひろまつた佛教が、支那における佛教の傳播に取つて多大の便宜を與へたのであるが、西域にパミール高原以東タクラマカン沙漠地方は、前漢の晩年以後佛教の流行地となり、インド文化の外に、ペルシャ文化並に遠くはギリシャ文化のある要素を含み、更に多分の支那文化をも加味して、如上

アジヤの文化交流

官吏として立身するための手段たるに傾き従つて教化の方面における権力者を失ひつつあつた。これに反して老子の教を承くる道家の思想は、不安に脅かされた人々に取つての安心の隠れ家として歡迎されるやうになつり、後漢に次ぐ魏晉の世になつて道家の思想が著しく盛んづてきた。その頃から佛教が支那の民間にひろまりつつあり従つて支那文化の上に新しい變化をもたらしてきたのである。

諸方面的文化要素の混成したる西域文化を現出するに至つたのである。近年タクマカン方面並にその東邊に接する敦煌地方において數次行はれた發掘の成果は、實に西域文化の過去の華やかなりし面影を想起せしむるものである。

那へ傳はつた佛教が、着實に支那の識者との間に味はれてきたのは後漢晩年のことであり、佛典漢譯の事業が重んぜられてきた。それと相前後して、後のいはゆる道教の基礎が築かれたものであり、その初めは支那古來の符呪を中心とする通俗信仰であつた。

その信仰が民間にひろまるとともに、從來から行はれた通俗信仰の他の要素が結びついて内容次第に複雑となり、更に老子の教をもつて教理を飾り遂に道教といふ名を用ふるに至つたのである。従つて道教は直接に老子の教から導きだされたからである。

佛教が支那に傳播してきたことは、アジャの内部における文化交流の



六 硬形式ラーダンガ  
第六中佛藝術の代表。こちらで第一次仏像を評議的藝術のそげ開拓を一つの像佛的表す。

—— 6 ——

重要なる動きを示すものであり、後漢に次ぐ魏晩の世に入つてより後、支那とインドの交通が從前に比して著しく頻繁となつたのみならず、佛教を中心とするインド文化は、先づ支那文化に對する新要素を供給し、更に延いては朝鮮・日本に對しても深き影響を及ぼすに至つたのである。佛教が支那古來の通俗信仰の結成といふ意味において膨脹してきたことも、外來思想たる佛教の傳播に刺激された爲であると考へ得るのであり、佛教と道教の勢力争ひが起つてきたこともまた當然のことである。しかしして道教が老子の教を探つておのれの教理を飾り從つて開祖として老子を崇める事情である。しかしことに至つたのは、當時老子の教が既に廣く民間に歡ばれてゐた頃に纏められたもので

魏晉・東晉の世相

魏晉の世に入つては、人々は後漢末以来の動亂に悩まされ生活の不安に脅かされてゐた。されば處世の道についての深き疑惑が人々の胸中にわだかまり、みづから慰むる爲めにおのづから老子の教を讃仰する思潮が漫つて、その思潮が時世の不安に結びついて厭世的自然主義の流行を

論據を老莊流の自然主義に求めるといふ態度が廣く歓迎されるに至つた。この態度がいはゆる清談であり、竹林七賢の名が廣く謳はれるやうになつたのである。

かくの如き厭世的自然主義の流行につれて、煩しき世間の俗事から解放されて朗らかな自然を楽しむといふ觀念が蔓りきたり、その觀念がおのづから魏晉から次の東晉の世にかけての文學藝術の上に反映されて

水永九年歲在癸卯暮春之初  
于會稽山陰之蘭亭脩禊事也  
羣賢畢至少長咸集此地  
有峻領茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以爲流觴曲水  
此其次雖無絲竹管弦之

標題神に正品經の序蘭亭と作の心快も自氏王羲書 謂筆之義王

部一の拓本武定品優の藏爰氏折不村中は圖。あるで筆名めを要を記す。

促すに至つた。有爲の人物もおのれの抜量を振ひ得べき機會を捉へることができます、家の歴史の古きを誇る門閥が、重視されるといふ世態となつてきた。  
かくて、正義必ずしも榮えず虚榮の光却て鮮かなりといふ世相の現實に失望して、一切の俗事を振り棄てて個人的享樂へ走り、その自棄の

對する鑑賞を促進させたものである。  
蓋し魏晉の世は、佛教が次第に民間にひろまつてきたといふことの後に後漢晩年以來の社會情勢の變化によつて、支那文化殊に文學藝術の外